

グリム兄弟の収集した民間伝承の生成と変容過程

——民話の地域性と普遍性の実態をめぐって

鶴田 涼子

ドイツ文学専門 後期課程 2 年

1. はじめに

本調査は、「グリム兄弟の収集した民間伝承の生成と変容過程——民話の地域性と普遍性の実態をめぐって——」というテーマのもと、報告者が研究対象としているグリム童話 *Kinder- und Hausmärchen* が現在どのように息づいているかを実地に調査すべく、計画されたものである。本調査では、ドイツのカッセル Kassel とシュタイナウ Steinau を活動の拠点とする。比較文化的な視点から、スイスのブルンネン Brunnen を経由してイタリアへ移動後、イタリアのシラクサ Siracusa 近郊にて現在伝えられている民話や歴史的物語の残され方を調査した。以下にその調査内容を報告する。また、今回の調査で得られた成果と今後の課題をまとめる。

2. 調査期間

2007年 9 月 9 日～9 月 17 日。調査日は、移動時間を除いた 7 日間である。

3. 調査目的

報告者が研究対象としているグリム童話は、グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785–1863 と Wilhelm Grimm 1786–1859 の 2 人を指す。) によってまとめられた民間伝承集である。本調査は、民話が口承によって伝えられていく際に保持される地域性と、書き言葉となって伝えられていく際に獲得される普遍性との狭間で、個々の民話がどのように伝えられ、残されたか、民話の生成と変容過程の追究を目的としている。また、グリム童話集に収められている民話が、現在のドイツでどのように残されているのか、その現状を実地に検証しようとするものである。これに関連して、本調査では、グリム童話が最初に出版された 1812 年の冬から約 200 年が経過した現在でもなおドイツに限らず世界中でグリム童話が親しまれている理由を探る。

4. 研究対象の概要

グリム童話 (通称 KHM) は、グリム兄弟が 1806 年頃から収集を始めた民間伝承集である。彼らは、ロマン派の詩人、クレメンス・ブレンターノに依頼されて民話の収集を開始する。しかし、収集された民話がブレンターノによって出版されなかったため、収集を行ったグリム兄弟自身により、1812 年に KHM として出版された。KHM は、200 話の民話と 10 話の聖者伝 (Kinderlegenden) からなり、個々の民話には、番号が付けられている。グリム童話は、7 回の改編が行われている。その過程は以下のようである。

エーレンベルク稿 1810 年／初版第一巻 1812 年、第二巻 1815 年 計 156 話／第二版 1819 年 161 話 初めて扉絵が載せられる／第三版 1837 年 168 話 扉絵の変更／第四版 1840 年 178 話／第五版 1843 年 194 話／第六版 1850 年 200 話／第七版 1857 年 200 話／小さい版 (選集版) 1825 年 50 話

※ 以降 KHM 番号を国際基準に従って付す。例：KHM60 『2 人兄弟』

5. 予備調査および報告者の仮説と課題

グリム童話は、ドイツの民話を集めたものである、とグリム兄弟は述べている。しかし、彼らが集めた民話には、ドイツ古来のものではなく、フランスやイタリア、またヨーロッパに限らずアジア圏で採話された民話が伝播したのではないかと推測されるものも多い。グリム童話では、ドイツを象徴する豊かな森が頻繁に描かれている。民話には、個々の話が、その土地ごとに、土地の特徴を伴って個別に生まれたのか、もしくは、各国で生まれた話が、伝承される過程で、その土地に対応する形で変化したのか、という問題が未だ残されている。ヨーロッパにおける最古の民話集として、イタリアのストラパローラによる『レ・ピアチエーヴォリ・ノッティ』、その後には、同じくイタリ

アのバジールによってまとめられた『ペンタメローネ』がある。グリム童話とこれらの民話集に収められた話の共通点は多く、グリム兄弟自身もこの共通性を指摘している。しかし、具体的に、民話の舞台となった地域相互間の比較を取り入れてこれらに収められた民話が考察されることはなく、民話の内容から頑健な共通点が表示されるまでに留まっている。民話の舞台となっているイタリアとドイツは、地続きでありながら、異なる環境を有している。特に、イタリアが周囲を海（水）で囲まれているのに対し、ドイツは他の国々に囲まれているため、水の供給源は、湖や河や泉である。そのため、自然物に対する憧れや象徴は両国間に隔たりがある。もし、イタリアで生まれた民話が伝播してドイツに辿り着き、それがグリム兄弟によって採話され、グリム童話の一つとなったならば、イタリアで生まれ育った人たちの表象世界が、グリム童話のどこかにまだ残されている可能性はある。また、イタリアには、ギリシアの物語が多くの遺跡とともに残されているため、神話との繋がりもまたグリム童話に見出されても良いだろう。そうなれば、グリム童話は、グリム兄弟が述べたようにドイツ古来の民話ではないことが具体的に裏付けられることになる。これに伴って、グリム童話の生成と変容過程について考察する際には、世界各国における民話を視野に入れる必要がある。

さらにグリム兄弟が、生粋のドイツの民話を語る最も貴重な存在と見なしていたフィーメンニン婦人は、実は17世紀にフランスから亡命してきた一族の子孫であることが、現時点では明らかとなっている。従って、彼女を生粋の古のドイツの精神を持つ語り部とは言いきれない。グリム童話には、イタリアで生まれた民話、フランス由来の民話が含まれると考えることが出来る。グリム童話には、ゲルマン的な世界を象徴する表象世界以外に、ヨーロッパの、もしくはアジア圏における諸特徴が無意識に描き込まれた痕跡が見つけられる可能性がある。今回の現地調査では、主な活動場所をドイツとイタリアの数都市に限定し、民話が採話された地へ赴くことによって、個々の民話における特徴の源泉がどこにあり、どのように各モチーフが絡み合っているのかを分析する。これにより、グリム兄弟の収集した民間伝承の生成と変容過程を考察する糸口を見つけることが出来ると報告者は考えている。

6. 調査内容および方法

本調査では、まず、グリム兄弟が民話の収集を開始した町へ赴き、彼らの遺品を通して、グリム童話の草稿や第一版に見られる特徴とその後の変容のあり方を考察する。また、グリム兄弟が語り部から民話を聞き取った地理的状況の情報を収集する。語り部の故郷を訪ねることで、民話の語り手が生まれ育った環境を調査する。次に、グリム童話が現在まで残されている理由を探る。その鍵となるグリム童話の持つ性質を知るために、類話の比較分析を行う。解明課題を明確にするため、グリム童話の中の一話である KHM60『2人兄弟』を本調査の中心対象とする。その選定理由は、第一に、グリム童話に最も多くの民話を提供した語り部であるドロテア・フィーマンが、この話の提供に拘っていること。第二に、KHM60『2人兄弟』は、AT567 *The Magic Bird-heart*, AT300 *The Dragon-Slayer*, AT303 *The Twins or Blood Brother* に類別される、形態的に古い形に則った民話の一つであること。（AT番号は、アールネ/トンプソンによって分類された民話の型を示すものである。）第三に、エーレンベルク稿に収められている話であるため、改編過程を追う意義が大きいと判断されるためである。『2人兄弟』は、エーレンベルク稿の時点で、ヤーコプの筆跡で残されている。

調査の報告に入る前にグリム童話について考察する際に特記すべき点を挙げておきたい。グリム童話は、グリム兄弟によってまとめられた民間伝承集であるが、我々が手にすることの出来るグリム童話は、口承の民話を書き留められた後、加筆修正を加えられたものである。この文字化された民話集は、民話が生まれた後、語り部による口頭伝承を介して、ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムによる書き止め、編集、そして、さらにヴィルヘルム・グリムによる再考という手順を踏んでいる。つまり、この文字化された民話には、個々の民話それぞれに、語り部、ヤーコプ・グリム、そして、ヴィルヘルム・グリムによる無意識の、もしくは意図的な変更が行われている可能性は否定し得ない。こうした実状に拘らず、現在までのグリム童話研究において、語り部について、また、語り部とグリム兄弟の交流について詳細に言及されていない。こうした理由から、報告者はこれまでの文献研究によってグリム童話を考察するのみでは、触れられることのない語り部の存在に着目する。従って、グリム童話の生成と変容過程について考察するためには、グ

リム童話に携わった各人の視点を踏まえ、段階を踏んで、調査と考察を進める必要がある。

7. 調査報告

① カッセルにて

カッセルは、ヴェザー河の上流、フルダ河に臨む、ヘッセン州の北の中心地である。カッセル・ヴィルヘルムスヘーエ駅から鉄路で東へ移動し、グリム兄弟広場を過ぎたところに、グリム兄弟博物館がある。カッセルでは、グリム兄弟博物館を訪問した。ここには、グリム兄弟の遺愛品、肉筆の原稿や書簡、彼らが使用していた家具や陶器、ガラス製品、そして末弟の画家、ルートヴィヒ・グリムが描いた家族の肖像画などが納められていた。ヤーコプ・グリムは、カッセルで、「人生の最も幸せな時代を過ごした」と自伝に書き残している。この地でグリム兄弟は、民話の蒐集に着手した。また、グリム童話集を初めて世に出したのもこの地である。ナポレオンの侵略が、カッセルにも及び、フランス軍に占領された苦しい状況下での刊行であった。母の死を乗り越えつつ、彼らはカッセルで約30年間を過ごした。言語学・文献学の研究を進める傍ら、民話の蒐集を進めた。グリム兄弟博物館では、写真撮影が禁じられており、彼らの遺品や絵画を写真に収めることは出来なかったが、ここには、『ドイツ法律古事誌』（ゲッティンゲン、1828年）や『古高ドイツ語のヒルデブラントの歌』（複写、ゲッティンゲン、1830年）などが展示されている。これらは大学で法律を学び、言語学の研究に取り組んでいた彼らの関心を明示するものである。また、その他、彼らの研究分野（文芸学、民俗学、法律学、歴史学、神話学、ロマンス語、スラブ語、ケルト語）における資料や、彼らの政治活動を物語る肖像画なども残されている。グリム兄弟博物館は、グリム兄弟に関する所蔵品の展示部門と、グリム童話に関する所蔵品の展示部門から成っている。博物館の職員の方の話では、博物館を訪れる方の年齢層は非常に幅広く、三世代、あるいは四世代に渡るとのことであった。特に、来館者について、「数十年前に童話を読んだ覚えのある人と、今現在、童話に親しんでいる子どもたちが同時にこの場を楽しむことが出来る。そして、昔聞き覚えのある話を思い出しては、これ、あのお話だ！という感動の声を耳にする。」と嬉しそうに語って下さった。これは、グリム童話の魅力であると同時に、グリム兄弟博物館の魅力でもあろう。報告者が訪れた時、孫を連れた老

夫婦と出会った。彼らは、博物館に設置された王座や王女の装飾品に喜び、KHM1『蛙の王様』の一部分を即興で演じてくれた。グリム童話を知っているからこそ実現され得るものである。演じている際の彼らの生き生きとした表情が忘れられない。老夫婦が昔の記憶を呼び覚まし、童心を取り戻している様子を窺うことが出来た。グリム童話は、どの世代にも親しみのあるものである。グリム童話には、読み・聞きの楽しさと、さらに語る・演じる楽しさがあることを身をもって実感した。

② 語り部の家訪問

ドロテーア・フィーマン（通称フィーメンニン）は、グリム童話に40話近い民話を提供した。童話集の第二版には、彼女の肖像画が掲げられるほど、彼女はグリム兄弟にとって貴重な存在であった。1816年に彼女が亡くなるまでに、グリム童話に最も多くの話を提供した語り部として名高い。カッセルに近い農村の宿屋に生まれたフィーメンニン婦人は、職人や軍人、車夫など、多くの人から民話を聞いた。こうして彼女は多くの民話を知り、その殆どを記憶した。土地の仕立屋に嫁いだ彼女は、6人の子どもを産んだが、ナポレオン時代の戦禍のため、財産をなくす。晩年、彼女は野菜などを売り歩き、生計を立てていたため、その途中でグリム兄弟の家を訪問し、兄弟に話を語ったとされている。グリム兄弟は、約一年五ヵ月に渡り、彼女から話を聞き取った。その殆どが、グリム童話のグリム童話第二巻（1815）に収められている。

フィーメンニン婦人の生家は、カッセルのツヴェーレン村、パウナタールにある。彼女の故郷の様子を知るべく、実際に、語り部の生家を訪ねた。その周辺は、今でも村と呼ぶに相応しい景観であり、周囲には畑が広がっていた。現在ではバスが通っていたが、交通の便は非常に悪く、17時以降はバスも通らなくなる。生家は、現在では家の半分がビール工場となっており、当時の建物は保存されていなかった。しかし、隣接する母屋の外観は、彼女が生まれた当時のまま残されていた。生家には、フィーメンニン婦人の肖像画（写真1）が壁や扉の数箇所に掛けられていた。また、ビール工場の中心には、小さな泉と彼女の像が作られていた。グリム童話集に貢献したフィーメンニン婦人の功績は、こうした形で、彼女の故郷で伝えられ続けていた。母屋（写真2）を訪ねると、中はレストランであった。話を伺ったところ、毎週土曜日になると、ストーリーテリングが催されるとのことである。語り



写真1 フィーメンニン婦人の肖像画

部は、フィーメンニンの装いで子どもたちを楽しませる。普段は、アルコールを提供する場であるが、開催日には子どもたちで非常に賑わうのだそうだ。特に名のない、仕立屋の妻の存在が、彼女の故郷で、今でもこのように伝えられている事実を目の当たりにした。後世まで与えた彼女の影響力は絶大であると言える。

③ グリム兄弟の家

シュタイナウ・アン・デア・シュトラーセは、フランクフルトからハーナウを超え、さらに北東へ行ったところにある。兄のヤーコプ・グリムが六歳、弟のヴィルヘルム・グリムが五歳の時に、グリム一家はこの地へ移り、それ以降、約七年間を過ごした。彼らの父親の故郷であり、また彼がこの世を去った地でもある。そうした哀愁を伴う思い出と共に、グリム兄弟の幼年期の思い出はこのシュタイナウに多い。

グリム兄弟の父は裁判官であった。彼はシュタイナウに転任した五年後に他界するが、それまで、裁判所と官舎を兼ねていた建物が現在も残されている。家の隣には菩提樹が今も尚そびえ立っていた。裁判所と呼ぶには小さい建物であるが、中へ入ると、小部屋がいくつもあり、仕事部屋という雰囲気は今も健在であった。現在では、家の前の庭には『ヘンゼルとグレーテル』に登場するお菓子の家、ヘンゼルが閉じ込められた小屋が子ども向けに設営されている。博物館の中は、写真撮影が禁じられていたため、資料として載せることは出来ないが、ここには、グリム兄弟の末弟のエーミールによる絵画が展示されていた。また、1820年代以降に始まるグリム童話の挿絵の変遷を物語るように、その原画が所蔵されていた。グリム童話の挿絵に関する研究は、まだあまり着手されていない。しか



写真2 母屋

し、近年、ドイツのハンス・イェルク・ウーター氏によって、挿絵の象徴に関する考察が進められていることが報告者の調べで分かっている。報告者は、グリム童話の扉絵について昨年、考察を行っている。その後の研究として、グリム童話の挿絵について考察を行う計画がある。その際には、あらためて同博物館を訪れ、資料の提供をお願いする予定である。

④ シュタイナウ城（グリム博物館）

シュタイナウ城の中は、小規模だが、グリム博物館になっており、グリム兄弟の生活や彼らの著作、教育や政治の分野への影響を提示する資料が展示されていた。ここでは、許可を得て、写真を撮ることが出来た。挿絵入りで刊行されたグリム童話第二版や、彼らが活躍した19世紀半ばの著作から、エーミールの自伝、また近年のグリム兄弟に関する研究書が納められていた。

⑤ マリオネット劇場

シュタイナウ城の隣、マルクト広場に面したところにマリオネット劇場がある。マリオネット劇場は、カール・マーガーズッペ氏によって創立された、家族経営の小さな劇場である。今年で78年目にあたる。ここでは、グリム童話を中心とした人形劇が、週に五日ほどの頻度で開催されている。グリム童話に収められているお話、例えば『ヘンゼルとグレーテル』、『赤ずきん』、『灰かぶり』、『ブレーメンの音楽隊』などを中心として10種類ほどの作品がある。報告者が訪ねた日は、グリム童話の中の一つ、『漁夫とその妻』が上演された。客席はほぼ満員で、平日であったことも関係してか、観客は70歳前後の方が大半であった。団体の予約が多いようである。その日、上演時間は一時



グリム博物館の所蔵品 1



グリム博物館の所蔵品 2

1. 中心がグリム童話第二版に載せられたフィーメンニン婦人の肖像画（左頁）と花輪の扉絵（右頁）（どちらもエーミールによる銅版画）
2. 兄弟が入っている風景画，エーミールの自伝（左上）とグリム兄弟の末弟，画家のエーミールの自画像（自伝の右隣）

間ほどであった。上演後、団員の一人に少しお話を伺うことが出来た。連日、たくさんの人が訪れることを、喜んでいて。大都市からは電車を乗り継いで、駅からしばらく歩かなくてはならないこの場所に、人形劇を観るために人々が集まってくれるのは、とても嬉しいと語って下さった。また、この劇場は、昔は馬小屋で、馬小屋を改装して作ったことを教えて頂いた。劇場は150席で、予約を入れないと見られないほど人気である。報告者も、事前に日本で予約を入れていたのだが、指定された席は後方で、150席は殆ど埋まっていた。団体は、シュタイナウ近郊からバスで訪れたようで、観劇後、劇場の外に設置されたワゴンで売られているポストカードを大勢の人が買い求めている。幾人かは、シュタイナウの歴史とグリム兄弟の家について書かれた著書を購入していた。このように人形劇

という形でもグリム童話は残されていることを知り、さらに実際にその現場の様子を体験すると、現在では語り部を通してではなく、グリム兄弟がまとめたテキストを介して、その後の民話の伝承と受容の状況を知ることが出来た。グリム童話の現在の生きた形を見ることが出来たように思う。これは、文字を介していないという意味ではむしろ、口承の再出発の契機になるのではないかと考えられる。

これまで、ドイツのカッセルとシュタイナウにおいて、語り部の調査や、グリム童話の現在の伝承形態とその実態について検証した。民話の地域性と普遍性を視野に入れた、グリム童話の生成とその変容過程についての今後の論考の足がかりとしたい。

次に、報告者は、具体的な民話を対象としたケーススタディの成果をここに記す。予備調査として、報告者は、本調査に出発する以前、日本で既に AT567, 300, 303に属する民話について事前調査を行っている。KHM60『2人兄弟』は、その一つであるが、実はグリム童話が出版される以前、先述の『ペンタメローネ』にもまたこの類話が2話収められている。しかし、これとは別に、イタリアの南に位置するシチリア島においても同類話が採話されていることが判明した。シチリア島は、イタリア本島から海を隔てているため、口頭による伝承は難しい。では、両類話はどのように伝承されたのだろうか。もしくは、別々に作られた可能性も考えられる。当ケーススタディでは、前者、民話の伝播説と後者、個別発生説の双方の面から、シチリア島で採話された民話と KHM60『2人兄弟』を、現地の自然表象や文化と合わせて比較検討を



シュタイナウマリオンネット劇場の中
開演30分前の様子

行った。

そのため、スイスのブルンネンからイタリアのルガーノ、ミラノを経由してシチリア島へ移動した。本考察には、ヨーロッパにおける各国間の風土や文化などの違いを探究する目的がある。そのため、今回は、知覚されるものの違いを肌で感じ取るべく、鉄路と航路による移動を行った。

⑥ シラクーサにて

シチリア島は、イタリア半島の南端に位置し、地中海に浮かぶ島の中では最大の面積、2万5400平方キロメートルの島である。ギリシア、ローマ、ビザンチン、イスラム、ノルマン、フランス、スペインと、幾多の民族が興亡を繰り返した複雑な歴史を背景としている。そのため、各民族、各時代の文化が残され、融合し、シチリアの文化が生まれている。このような背景から、イタリアの他の地域とは様相を異にする。文化遺産が多く残されていることも特徴である。州都のパレルモは、人口70万人を超える大都市であるが、報告者が訪れたのは、シチリア島の東部に位置するシラクーサである。報告者が訪ねた9月は、気温約25度であり、砂埃が多く、乾燥が非常に激しかった。シラクーサは、新市街が広がるシチリア本島と、旧市街の小島オルティージャ島からなる。紀元前8世紀、ギリシアの植民地として建設された。シラクーサにも、遺跡が多く残されている。道路の中心に岩のように、建物の一部が露出した形で残存する状態をよく目にした。シラクーサでの調査目的は、パピルスの採取と製紙方法を知るため、パピルス博物館とパピルスの泉を訪問すること、また、世界遺産に指定されている操り人形劇の歴史、題材、文化遺産の現状を検証することである。本報告では、後者に関する成果を詳述する。

⑦ 『2人兄弟』の類話を通しての文化比較

『2人兄弟』の類話は、2人の兄弟が、悪者を退治するために出かけ、どちらか一方が悪を倒し、姫を妻として迎えるという筋である。グリム童話集の『2人兄弟』は、ドイツのパーダーボルン地方で採話された。これに対して、シチリアで聞き取られたお話は、『双子の兄弟』と呼ばれる民話であるが、具体的な出自は定かではない。話に見られる細部の違いは、ドイツとイタリア（シチリア）の環境に起因するもの、また、国による文化の違いがもたらすものであることが、今回の現地調査においていくつか確認することが出来た。まず、最も特徴的な違いは、2人兄弟が向か

う場所である。グリム童話は、兄弟は狩猟のため、森へ向かうのであるが、シチリアの民話では兄弟は海岸へ辿り着く。それは当然のことながら、シチリア島はどの方面に向かっても海へと到達せざるを得ないためでもある。シチリアは、草木が生えている所もあるが、多くは乾燥した砂で覆われている。中には石灰岩と思われるところもある。家から出た2人が生きていくためには、食糧を確保するためにも、海へ行かなければならなかったものと推測される。森は、元来、人間に自然の恵みを与える場であると同時に、危険な場所でもある。KHM60『2人兄弟』では、森が兄弟の味方となり、彼らの運命に荷担する。これと対応しているのが、シチリアにおける海である。海もまた時に人間を助け、時に脅かす自然である。この民話では、海は人間に助力する。

シチリアの民話の場合、海に出た兄弟は、金の魚と出会う。民話に登場する動物は、国によって異なるが、例えば、KHM60『2人兄弟』の場合、兎、狐、狼、熊、ライオンである。狩猟目的で森へ入った兄弟は、この動物を自分たちのお供にする。これに対して、シチリアの民話では、魚と馬しか登場しない。森に住む動物が一切登場しない理由も、シチリアの環境を考慮すると納得がいく。報告者は、帰国後、類話に見られる文化差について比較を試みた。新たに気付いたことは、シチリアの民話に「競技会」、「騎士」という言葉が用いられているということである。シチリアには、闘技場や競技場が今も残されている。報告者が訪れたシラクーサにも、闘技場跡が二ヶ所、競技場跡が一ヶ所見られた。獣が登場する戸口も確認することが出来た。闘技の場において、獰猛な獣は、人間の仲間になることなど考えられない。ギリシアにおける猛獣へのイメージは、民話の中にも反映されていると考えられる。また、シチリアにおいて、騎士は、数々の戦いの歴史を辿る際の、最重要要素の一つである。なぜなら、シチリアの人々にとって、彼らの先祖の歴史は決して忘れ去ることの出来ない過去だからである。その理由を、重要無形文化財である人形劇から提示したい。



円形劇場 1

中央付近に見られる通路から剣闘士や猛獣が出入りした。



円形劇場 2



剣闘士や猛獣の出入り口

⑧ プーピ・シチリアーニ

シチリアの伝統芸能の1つにプーピ・シチリアーニ Pupi Siciliani がある。2001年に、ユネスコは、世界の19の無形遺産を「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」として発表した。シチリアの大衆芸能として普及したプーピは、そのうちの一つである。この伝統芸能の起源についての詳細は不明であるが、18世紀頃から現在の形になったと言われている。19世紀にナポリやシチリアを中心として普及した。19世紀後半から世紀末にかけては、人形劇の影響もあり、シチリアで騎士道物語の出版が盛んになったことが分かっている。操り人形劇の題材は、主にフランスのシャルル・マーニュ時代の騎士物語がベースとされる。例えば、主人公は、オルランド、リナルド、悪役のサラセン人、アンジェリカ姫などである。シチリアの中では、主に、パレルモやシラクサにまだ幾つか劇場が残されている。報告者が訪ねたシラクサの劇場の舞台は、非常に小さく、横幅が3メートル程であった。演目のストーリーは大まかに決まっているようであるが、台本というものはない。プパーロと呼ばれる操り人形師が即興で話を進めていく。

シラクサにおける人形劇や人形そのものは、現在では、観光客向けであるように感じられた。テレビが普及する以前、操り人形劇は各地への巡業もあり、毎日人が集まる日常的な大衆娯楽であったが、今日では貴重な伝統芸能となった。この人形は、シチリアを語るに欠かせない伝統民芸品である。人形劇と言っても、子どもを対象としているわけではない。題材も童話ではない。報告者が訪ねた日は、舞台の前に数人の男性が座り、上演を待っていた。演目は、おそらく、東洋の姫アンジェリカを求めて旅をする中世騎士道物語であったと思われる。乱闘シーンが非常に激しく、人形の動きも手の込んだものであった。他には、12騎士とサラセン人の戦いなどもあるようである。史実を題材としたものばかりである。現在は伝承者も少なく、数箇所で見ることが出来ない。

シラクサの街を歩いていると、中世騎士の操り人形を目にすることが出来る。街中で、壁に掛けられて売られているプーピは約40cmの大きさで、色鮮やかな衣装や金属製の盾や鎧を身につけている（写真参照）貴重な伝統芸能の主役であるプーピを、シチリアの人たちは、日常的に見る事が出来るという現状から、伝統工芸品が過去の歴史と共に大切に伝承されていく様子を知ることが出来た。侵略と支配による苦渋をなめてきたシチリアの歴史を物語るプーピ・シチリ



プーピ・シチリアーニ

金属の武具に身を包んだ騎士たち。劇の最後の場面。
街頭でも、こうした騎士たちのプーピが売られている。

アーニは、いつまでもシチリアの人びとの心に根差し、愛されているに違いない。だが、こうした文化財の保存には、絶えず人々の意思が拘ってくる。文化財が朽ちてしまうのも時間の問題かもしれないと感じざるを得なかった。伝統技術を継承する者がいなければ、こうした無形文化財はいつしか消えて忘れ去られてしまうだろう。それは、同時にシチリアの歴史が忘れられてしまうことになりはしないだろうか。歴史を題材とした人形や人形劇が、日常に目に触れる形で保存されていくことは、単に文化財を守る目的だけでなく、シチリアの人の過去に対する意識を温存することになる。シチリアに住む人々が共有する思想や宗教といった、独自色の強い価値観が守られるためにも、地域固有の芸能として、伝承され続けて欲しい。いつしか、形骸化されたものとならないように、これまでプーピを守り続けてきた、彼らの精神世界を持ち続けて欲しいと願う。

それぞれの民話が、人間の日々の営みの側面を描いているのであれば、登場人物の行動や反応がその土地や時代ごとにおける人間の考えを映し出すことになる。また人形劇でも、地域性は失われておらず、題材や、登場人物の口調、仕草、服装に端的に表れている。土地や時代によって、伝承されるもののモチーフなどの細部は、社会的、文化的コードによって変化する。先述のように、シチリアには、先に取り上げたような、民話があり、イタリア本土には、『ペンタメローネ』などの民話集があるにも拘らず、シチリアの人形劇では、騎士物語が中心であった。歴史的な題材が人形劇で扱われているのである。特にシチリアは、歴史的に複雑な事情ゆえに、民話よりも史実そのものが

脚色された形で、演じられている。騎士は、民話に登場するが、民話が伝統芸能の演目となることはないようである。具体的な戦いなどを語ることを主題としていない民話よりも、実際のシチリアの歴史を伝える物語が、彼らにとっては大切なのではないだろうか。

おわりに

プーピ・シチリアーニでは、民話ではなく、歴史的な事件を直接的に題材としたお話が演じられており、ドイツほど民話が重要視されてはいなかった。こうした実態には、次のような要因が推測可能ではないだろうか。グリム兄弟が民話を収集し、本として出版した背景には、グリム兄弟の子どもたちに対する教育的観点、フランスに対するドイツ意識の統一の意図があった。グリム童話の改編にもこうした彼らの意図は影響している。彼らの考えが他の人に受け入れられたために、グリム童話は重要視されてきたのだらう。グリム兄弟は、意識的に民話の内部に、読者に愛国心を持たせようとする意図を込めようとしたわけではなく、民話を集めること自体が重要であった。ナショナリズムとの関係が深いために、『グリム童話』はドイツで、これほどまでに大切にされたのである。後の調べによって、彼らが編んだ民話集は、生粋のドイツから生まれた民話ばかりではないことが指摘されている。しかしながら、シチリアにおいて、プーピ・シチリアーニが伝統芸能として大切に守られているように、ドイツでは、『グリム童話』が、ドイツの国民意識を各人に抱かせる役割を少なからず果たしていた。もしくは、世界の民話が流れ着いたある一時の形が書き止められた証として、彼らの功績が認められているのである。2005年、ユネスコは『グリム童話』を、世界に意義のある、世界の史料遺産として認定した。これが、『グリム童話』の貴重性を実証している。

歴史に根付いた精神世界から生まれた民話は、地域を容易に渡ることは出来ない。歴史や地理的環境が異なれば、話が流れ着いたとしてもその奥に潜む心性までは、理解出来ないはずである。従って、こうした意味で、民話は、各地域ごとに新たに生み出されるものであると考えられる。植物の種がドイツの地に根を生やしたならば、その植物は、ドイツの水と空気によって育ち、新たな生を持つことになる。今後の調査では、その新たな生がいかに育まれ得るのか、その根底にあるドイツ文化に着目する。とりわけ、民話を語り継ぐドイツの人の心性に焦点を当てていきたい。

参考文献

- Grimm, Jacob und Grimm, Wilhelm: *Kinder- und Hausmärchen*. Band 1, 3, 2. Ausgabe *Letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm Mit einem Anhang sämtlicher*. Stuttgart 1980.
- Grimm, Jacob und Grimm, Wilhelm: *Schriften und Reden*. Stuttgart, 1985.
- Grimm, Emil: *200 Jahre Brüder Grimm, Ludwig Emil Grimm 1790–1863 Maler, Zeichner, Radierer*. Kassel 1985.
- Scherf, Walter: *Das Märchenlexikon*. München 1995.
- Uther, Hans- Jörg: *Brüder Grimm Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 3., München 1996.
- Karlinger, Felix: *Inselmärchen des Mittelmeeres*. Düsseldorf/Köln 1960.
- Aarne, Antti und Thompson, Stith: *The Types of the Folktale*. Helsinki 1964.
- 鳥居正雄, 米山喜晟『イタリア・ノヴェッラの森』1993年, 佐井寺三角社。
- 高橋健二『グリム兄弟・童話と生涯』1984年, 小学館。
- スティーブン・ランシマン『シチリアの晩禱』(榊原勝, 藤澤房俊訳) 2002年, 太陽出版。
- 奈良大学文学部世界遺産コース編『世界遺産と都市』2001年, 風媒社。